

東京の文化財

目次

江古田の獅子舞「芳花園での庭草の舞」

東京都指定文化財の新指定	1~2
東京都指定有形文化財(建造物)「旧李王家東京邸」保存改修工事について	3~5
文化財を生かす(品川区・町田市)	6~7
「横山大観旧宅及び庭園」～新指定の国指定史跡及び名勝～	8

東京都指定文化財の新指定

東京都教育委員会は、東京都文化財保護審議会(会長 鈴木誠)から答申を受け、平成29年2月23日、2件の新指定を含む計3件について決定しました。

今回の「東京の文化財」では、新たに指定等をした文化財について御紹介します。

新たに指定するもの

有形文化財(絵画)	しほんぼくがたんさいしやうきず 紙本墨画淡彩鍾馗図
所有者	個人
所在地	御蔵島村

本作品は、鍾馗が右手に剣を持ち左手で小鬼を捕え、今にも退治しようという緊迫した図様で、速筆で力感と動感をはらんだ姿態をよく捉え、衣文を張りのある線描でまとめ上げた力強い作品です。画面右下端に「藤

原信香書」の款記があり、狩野派の絵師英一蝶の作品であることが知られています。本紙は縦横24枚の紙を貼り合わせ縦155.6cm×横91.2cmの大型画面で、鳥で施されたと思われる紙表装が施されています。

画面上部4か所に乳の痕跡が残り、近世の鯉轆の例と同様に和紙を糊で継ぎ合わせた構造であることから、当初は、轆旗として制作され、後に修理を施し掛軸として仕立てられたと考えられます。

弘化3年(1846)の年紀のある『伊豆御蔵島年中行事叩』により、御蔵島では端午の節句の際、各家で紙轆を飾り赤飯を炊いて祝ったと伝えられますが、本図は状態が悪く飾られることがなくなって久しいといえます。

島に残る英一蝶の作品群は、一蝶が咎あって三宅島に島流しにあった期間中に制作されたもので、「島一蝶」と呼ばれ貴重であり、昭和31年から33年に都教育委員会による『伊豆諸島文化財総合調査』、平成20年度に「伊豆諸島英一蝶関連絵画調査」が行われ、新島村及び御蔵島村にてその全容が再確認されました。

本作品は、絵具、紙などの画材の入手に不自由しながらも優れた描法を持つもので、美術的価値は極めて高いです。また、御蔵島の歴史や生活をうかがい知ることができ、文化史上の価値も高いといえます。



紙本墨画淡彩鍾馗図

無形民俗文化財 (民俗芸能)	えごたししまい 江古田の獅子舞
	江古田獅子舞保存会
保持団体	江古田獅子舞保存会
伝承地	中野区江古田地区



お練り行列



氷川神社での「先舞」

「江古田の獅子舞」は、中野区北東部に位置する江古田・江原町・丸山の鎮守氷川神社の祭礼にて奉納される一人立三匹獅子舞で、3人の獅子役が笛・太鼓・さらに合わせて踊る民俗芸能です。

毎年10月第1日曜の正午に江古田一丁目の獅子宿を出発した獅子舞行列は、新青梅街道を西進して同三丁目の氷川神社まで1時間半かけて練り歩き、同社境内にて夜半まで獅子舞を上演します。平成28年現在の保存会員は約500人、運営・上演の中核を担う舞楽部には65人が加入しています。

当地の旧名主家に伝来した『獅子由来并大蔵院起立書』には、慶安2年(1649)に修験の僧宥圓が獅子舞を伝授したと記されています。また、近世末期の作である『江古田獅子舞巡行絵巻』には、現在とほぼ変わらない獅子舞行列の姿が描かれています。

当地の獅子頭は、角や目が見えなくなるほどの長い羽をたくさん付けているのが特徴です。6kgを超えるその重い頭を付けて重心を低く構えたり、地面に届くほどに仰け反る所作を行うなど、1時間に及ぶ演舞は高い技術と体力が必要とされます。また、芝原と呼ばれる土壇を舞台とすることや、四神が付随する例は、三匹獅子舞としては珍しいものです。

江古田の獅子舞は、都内でも最も古くから伝承されている三匹獅子舞の一つであり、地域的特色を示すものとして大変貴重です。



氷川神社での「帯舞」

既に指定しているものに追加して指定するもの

史跡	すずき いせき 鈴木遺跡
	所有者 小平市
所在地	既指定地 小平市鈴木町一丁目450番地8、同450番地9、同487番地1、小平市回田町269番地3 指定面積 計1,858.94㎡
	追加指定地 小平市鈴木町一丁目390番地23、小平市回田町331番地4 追加指定面積 14,597.8㎡

鈴木遺跡は、標高約74mの武蔵野台地の中央に位置し、石神井川のかつての源流であった谷頭部を東に開く馬蹄形に取り囲んだ、約3万5千年から1万5千年前に営まれた後期旧石器時代を主体とした都内でも最大級の規模と内容を有する遺跡です。昭和49年の発見以降、現在までに都内のみならず関東地方においても最多規模である約4万点の石器と約7万点の礫が出土し、その石器の種類も多様です。出土した石器は、関東地方における旧石器時代の石器の変遷及び当時の生活の痕跡を、後期旧石器時代の最古段階から同時代最終末まで連続して確認、研究することが可能な遺跡として平成24年3月21日史跡に指定されました。

追加指定地は、谷頭部を取り囲んで馬蹄形に形成される南側台地上の農林中央金庫小金井研修所跡地のうち、旧谷頭側に近く旧石器の保存が濃厚な地点として小平市に寄付された地区(保存管理等用地)と、谷頭部北側の台地端の分譲住宅建設に伴う提供公園として寄付された土地(鈴木町一丁目390番地保存区)の2か所です。いずれも、谷頭部を取り巻く台地際の重要地区として保存のため寄付され、今後小平市が保存計画を作成し保護、活用を図っていくこととなっています。



保存管理等用地



鈴木遺跡の位置・範囲、指定地の範囲

小平市に寄付された地区(保存管理等用地)と、谷頭部北側の台地端の分譲住宅建設に伴う提供公園として寄付された土地(鈴木町一丁目390番地保存区)の2か所です。いずれも、谷頭部を取り巻く台地際の重要地区として保存のため寄付され、今後小平市が保存計画を作成し保護、活用を図っていくこととなっています。

保存管理等用地及び鈴木町一丁目390番地保存区は、鈴木遺跡において谷頭部を取り巻く地形を保存し、台地端に遺存する旧石器時代の遺構と遺物を保全する上で重要な地区です。

東京都指定有形文化財(建造物)

「旧李王家東京邸」

保存改修工事について

株式会社西武プロパティーズ
株式会社日建設計



東立面図

■旧李王家東京邸の概要

名称	旧李王家東京邸
構造	鉄筋コンクリート造(木造小屋組) スレート葺 ^{ぶき}
規模	地下1階地上2階塔屋付(地下は現存しない。)

旧李王家東京邸(李王邸)は、日本の王族であった李王家の東京本邸として建てられた建物です。ここに生活していたのは、李垠(1897-1970)殿下と妻である梨本宮方子妃とその御家族です。

竣工は、昭和5年(1930)。設計は、当時、皇族の住まいを一手に引き受けていた宮内省内匠寮により行われ、清水組(現・清水建設株式会社)によって施工されました。

戦後、西武グループの所有となり、昭和30年、客室数35室で赤坂プリンスホテルとして開業しました。昭和58年、新館(設計:丹下健三、現存せず。)の竣工以降は、宿泊施設の役目を終え、主に婚礼施設やバー・レストランとして利用されてきました。

平成23年(2011)には、昭和初期の皇室の邸宅建築としての特性と意匠が評価され、東京都の有形文化財(建造物)として指定されました。

屋根は、切妻のドーマーウィンドウを取り付けた勾配のある寄棟に、尖塔を組み合わせた天然スレート葺となっております。外観はイギリス・チューダー様式を基調とし、車寄開口部や階段室ステンドグラスに、様式の特徴である半円を少し押し潰したチューダー・アーチが見られます。内装は、古典主義の列柱、ジャコビアン様式風のねじり柱、和風の網代天井が用いられるなど、多様なデザインが混在しています。

竣工当時の全体構成は、中庭を囲む口の字形の平面プランを持ち、東側を入口として南側1階に大客間、食堂等の来客諸室、2階に書斎、寝室、居間等の私室を配置していました。正面玄関を挟んで北側には事務諸室が並び、北西側には木造の侍女部屋が配置されていました。また、地下は厨房及びボイラー等設備室として使用されていました。



▲1階平面図(昭和5年竣工時)



▲2階平面図(昭和5年竣工時)

■再整備について

ホテル開業以来、建物は丁寧に維持・保全がなされてきました。

平成20年、今後の維持整備のため、学識者による、李王邸等検討委員会を立ち上げ、歴史的価値や保存・整備手法の検討を行いました。委員会でまとめられた、皇室建築としての価値やメインファサードの保存等の提言を踏まえ、文化財の指定を受け、敷地全体の再開発を機に、再整備を行うこととなりました。

再整備においては、当該敷地の再開発コンセプト「みどり」と歴史に抱かれた国際色豊かな複合市街地」と合わせて、レストラン・婚礼施設として更なる活用を図るため、曳家・保存改修・増築を行っています。



▲曳家位置図



▲曳家の様子

■曳家工事について

敷地全体の工事計画との関係から、李王邸を安全に保存するため、平成23年から曳家工事を行いました。地階や後年に増築された部分等を除却した後、1階床スラブの下にマットスラブを増し打ちし、マットスラブごとジャッキアップを行いました。その後、南東方向へ約44m斜曳きして仮置き（一次曳家）し、最終位置の本設先行床躯体構築後に約31m移動する二次曳家を行いました。本設位置は、当初位置より南東に13m移動しています。

新たな配置においても、従前同様、前面にアプローチ空間を設け、建物が建てられていた南側の空地を取戻す等、「邸宅」としての佇まいを損なわない計画としました。

また、耐震性能を向上させるため、曳家後の本設置に際し、建屋の下に免震ゴム等を設け、免震構造としています。

■保存改修工事について

長年の使用や経年による劣化・不具合を補修し、レストラン・婚礼施設等として活用するため、平成25年より保存改修工事を行いました。工事においては、「保存」に重きを置いて一部の復原を行い、外観を中心に文化財としての価値向上を図っています。

①スレート屋根葺き替え

葺材である天然スレート石に、割れ、欠け、落下が散見され、全体的な劣化が認められたため、全面葺直しを行いました。既存のスレート材を可能な限り再利用し、東面の屋根に使用しました。また、不足材は、当初材と色の合うカナダ産材にて葺き替えました。

②外壁モルタル補修

外壁のモルタル塗は、調査の結果、全体の80～90%で浮



スレートの葺き替え



外壁モルタル塗り



東側外観 (修理前)



東側外観 (修理後)

きの発生が確認され、また、モルタルの上に塗装されていた白いペンキも後年のものであることが分かりました。今回の工事では、旧塗膜を除去した上で繊維ネット等で塗膜補強を行い、この建物の特徴でもある渦模様を再現するため、道具の選定や材料調合の試作を経て、色モルタルを全面塗直し、竣工当初のクリーム色の外観に復原しています。

③東側立面・ベランダの復原

メインファサードである東側は、北部2階バルコニーに後年の増築がなされていました。増築部を除却し、バルコニーに設けられていた木製パーゴラ等の復原を行い、皇室邸宅の特徴である、左右非対称の伸びやかな姿を取り戻しています。

南の顔となる1階のベランダも後年の活用に合わせて平面形状が変更されていましたが、痕跡や当初図面をもとに半円ステージが付いた竣工当時の姿に復原しました。

④花台、照明復原

室内の照明は当初のものも一部保存されていましたが、主要な部屋のもの、ほとんどが失われていました。また、車寄せと塔屋部の花台が失われていました。

竣工当時の古写真や古図面が宮内庁に保管されており、照明の図面についてはその全てが揃い、花台についても古写真等で詳細が確認できたため、今回の工事では重要保存部分と位置付けたメインロビーである広間のシャンデリア及びブラケット照明、外観の要となる車寄せ・塔屋部の花台を当初の重厚かつ華やかな意匠で復原製作を行いました。



1階広間復原照明



1階広間復原照明

⑤大客間壁織物製作

工事の最中、1階大客間の壁紙の下から、当初の壁織物が発見されました。また、当時その織物を製作した川島織物（現：㈱川島セルコン）に試織が残されていることも判明したため、当初の色・柄にて織物を製作しました。大客間は、照明・飾り壺・家具も当初のものが残り、最も格式の高い部屋であると同時に、当時の空間が最も再現された部屋となっています。



当初の壁織物



■増築・改修について

本建物は、皇室邸宅の特徴の一つでもある口の字型平面をしていますが、後年の活用で中庭部に厨房が増築されていました。

今回の工事では、厨房を除却し、旧侍女部屋の外壁ラインを踏襲して増築、中庭空間を取り戻しました。また、活用上、婚礼施設として欠かせないバンケットを増設しています。

さらに、室内において既に当初の内装が失われていた部分は、活用エリアと設定し、バーやホールとして改修しています。機能の付加と明確なエリア設定にて、文化財保存と事業性の両立を図っています。

■今後について

皇室邸宅としての記憶を継承しつつ、新しい時代のおもてなし空間（レストラン・ウェディング施設）と呼応し、所有者としてもこれまで同様、多くの人に親しまれる建物となることを目指して、活用を進めていきます。



増築側からみた中庭



南側外観

事業主：㈱西武プロパティーズ
 設計・監理：㈱日建設計
 施工：西武・大林・前田 建設共同企業体（保存改修）
 大成建設（曳家）

旧李王家東京邸（赤坂プリンス クラシックハウス）
 所在地：千代田区紀尾井町1-2
 アクセス：東京ガーデンテラス紀尾井町内 東京メトロ半蔵門線・有楽町線・南北線「永田町」駅・東洋メトロ銀座線・丸ノ内線「赤坂見附」駅下車徒歩1分
 お問い合わせ：㈱西武プロパティーズ（電話：04-2926-2401）

竣工100年を迎える清泉女子大学本館

(旧島津公爵邸袖ヶ崎本邸洋館)



ベランダと庭園

日々使われている、公爵の館

日本近代建築の礎を築いたイギリス人建築家ジョサイア・コンドルは、明治10年(1877)工部大学校(現 東京大学工学部)教授として来日し、任期満了後も日本に留まり建築家としての活動を続けました。特に邸宅に優れた作品を残し、都内に現存するものには旧岩崎家住宅洋館(岩崎久弥茅町本邸)、三菱開東閣(岩崎弥之助高輪邸)、旧古河氏庭園洋館(古河虎之助邸)などがあります。

これらの建物は、現在ではかつての邸宅を中心とした公園や、限られたメンバーが対象の社交場といった「訪れる場所」となっています。その中で、清泉女子大学本館(旧島津公爵邸袖ヶ崎本邸洋館)は、邸宅の姿を残しつつ、教室やチャペルなどが入る大学の施設のひとつとして日常的に使われている稀有な存在です。



建物正面

景勝地・袖ヶ崎に建つ洋館

清泉女子大学のある高台は「島津山」と呼ばれています。かつてそこに島津公爵邸があったことに由来しています。「袖ヶ崎本邸」の「袖ヶ崎」という地名は、それより古く江戸時代からあります。東は狭い谷に、南と西が比較的開かれた低地に面し、北側だけが江戸市街の方向に広がる台地に続いており、形が着物の袖に似ているところからその名が付いたといわれています。

南西からは富士山が、南東には海が見えるこの絶景の地に目を付けたのは、仙台藩5代藩主の伊達吉村でした。寛保3年(1743)64歳で隠居した際に、ここに下屋敷を求め終の棲家とし、書画などを楽しみ風景をめぐる老後を送りました。

明治維新を迎え、袖ヶ崎の屋敷は伊達家から新政府に渡ったのち島津家のものとなり、明治12年(1879)新た

に和風の邸宅が建てられました。それから四半世紀以上経った明治39年、邸宅の新築が計画されます。上流階級の邸宅は洋館が主流となっており、設計をコンドルに依頼したのです。

建物は、外壁に白いタイルを施した煉瓦造2階建てで、ルネサンス建築を基調に国々の伝統などを織り交ぜたネオ・ルネサンスという様式です。南側にはコンドルの作品の中でも最も優美なベランダが設けられ、庭園に面しています。そこからは、東京湾越しに房総半島、おそらくは富士山も眺められたことでしょう。コンドルは必ずといっていいほど邸宅の南側にベランダを造った建築家として知られています。「霧の都」ロンドンで生まれた彼は、日照時間も長く温暖な日本の風土にベランダが向いていると考えたのではないのでしょうか。

江戸時代以来屋敷の入口は中原街道から入った北側にありました。北側だけが台地に面し、高低差なしで出入りができるからです。洋館竣工当初も、そこに門柱が据えられ、馬車はそこを通過して玄関前の車寄せに付けられました。しかし後に敷地の北の部分に住宅が建ったため、入口が現在の位置に移っています。

普段は非公開ですが、大学では毎年約50回の邸内見学ツアーを実施しています。さらに、本年は竣工100年にあたり、5月7日・8日・9日の3日間に限り旧島津邸のライトアップをはじめコンサート、記念式典などのイベントが予定されています。



内装は黒田清輝が担当し、ステンドグラスは国内ステンドグラス製造の草分け、宇野澤組ステンド硝子製作所の木内真太郎が制作した。

「清泉女子大学」

所在地：東京都品川区東五反田3-16-21

公開及び竣工100年記念行事については、

清泉女子大学ホームページ <http://www.seisen-u.ac.jp/> で

旧荻野家住宅

東京都指定有形文化財旧荻野家住宅



新緑のお茶会

東京都指定有形文化財（建造物）旧荻野家住宅は、約200年前（江戸時代末、1830年代頃）に、医院を兼ねた医者の家として建てられました。元は町田市三輪町にありましたが、所有者からの寄贈を受け、昭和49年（1974）に市内の薬師池公園内に移築されました。実際に医者だったのは初代だけだそうですが、荻野家には薬研や天秤、薬棚など、当時の医療に関わる道具なども残されており、その一部が市に寄贈されました。

建物の特徴

旧荻野家住宅は木造平屋建て、建物面積145.53㎡（約45坪）、茅葺屋根の古民家です。正面に揚戸や格子、駒寄があり、街道筋にある町屋のような意匠ですが、開放的な縁側を設けた座敷は、比較的間口の狭い町屋の造りではあまり見られないもので、農村部の広い敷地を前提とした間取りになっています。

室内も、当時は高級品だった畳を使っており、座敷の格子窓や欄間なども、繊細な意匠を凝らした造りになっています。医家としての当時の荻野家の家格の高さを感じさせます。

正面と奥の2か所に土間があります。一般的な農家の土間は、台所、玄関、屋内での農作業のスペースなどを兼ねた広いものですが、旧荻野家住宅の正面の土間は、元は医院の待合所として使われたといわれています。奥の土間の方には、囲炉裏やかまどがあります。

正面の土間から右手に上がった部屋は「チョーゴザシキ」と呼ばれており、薬の「調合」や診察に使用した部屋であるといわれています。部屋の奥の棚は「チョーゴトダナ」と呼ばれており、いずれも医者の家であった名残をとどめています。

古民家の耐震補強

旧荻野家住宅は、平成27年2月から平成28年2月のおよそ1年間をかけて傷んだ茅葺屋根の葺き替えや柱などの修繕の他に、耐震補強も併せて実施しました。

耐震補強は、文化財としての価値を損なうことのないよう建物の構造や外観を大きく変えずに、揚戸の外観はそのままで内側に格子を入れて壁としたり、補強用のパネルを土壁の中に塗り込めたり、土壁を元の厚みより少し厚く仕上げているなど、様々な手法で施してあります。

古民家の活用

通常公開は、正面の土間に入って、そこから室内を眺めるだけなのですが、工事完了後の旧荻野家住宅では、葺き替えて黄金色に輝く美しい茅葺屋根や、格子や欄間などの繊細な造作を鑑賞していただくため、特別に室内の見学会や、広い座敷を舞台のように使ったお茶会なども実施しました。町田市を表敬訪問された海外からの賓客のおもてなしにも利用され、活躍の場が広がっています。

文化財の保存上、制約は多くありますが、室内に人々が集う旧荻野家住宅は、やはり建物としていきいきと輝いて見え、今後、より多くの人に親んでいただけるよう、町田市は活用機会を広げていきたいと考えています。



海外の賓客おもてなしの際の設え

「旧荻野家住宅」

所在地：町田市野津田町3270 薬師池公園内

アクセス：小田急線「町田」駅北口（POPビル先）21番乗り場から本町田經由鶴川駅行き、又は本町田經由野津田車庫行きバスで「薬師池」か「薬師が丘」下車

問合せ先：町田市教育委員会生涯学習部生涯学習総務課文化財係（電話：042-724-2554）

